

---

# ComPliCaTion

Shinji

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

C o m p l i c a t i o n

### 【Nコード】

N 4 4 7 1 I

### 【作者名】

S h i n j i

### 【あらすじ】

ポジティブでちょっと考え事に走るところがある高校生、遊馬俊。

彼は何かとトラブルに巻き込まれる素質を持っている。

現にお節介な幼馴染や、口の達者な変人眼鏡、自己中心的な生徒会長に巻き込まれている。

……それでも、まだ人間だからいい。

最近では、想像以上の問題児が現れなぜか同居するハメに？

作者初めての作品なので、読みづらかったり誤字があつたりと問題があるかもしれません。

ご感想・ご指摘・ご意見・ご教授、何でも待っています。

それでは、ラブコメファンタジーお楽しみください！！

## Prologue (1)

「それじゃあ、行ってくるな」

「ああ、いつてらっしゃらい。今度はいつ帰ってくる?」

「2ヶ月はかかりそうだな……いつも家のことを任して悪いな」

「それはいつこなしだろ、母さんがいない分俺が頑張るのは当たり前だよ」

「そうか……。それと、気をつけるよ?」

「火の消し忘れとか、寝坊とか?」

「おっと、時間が無い。まあ、それも少しは心配だが……もう出るな」

「あつ、いつてら」

バタン

いきなりだけど、俺の名前は遊馬俊 (Asuma Syn)。

只今、学校に向かって歩いている高校一年生です。

最初の父さんとの会話もあるし、家庭事情を少々話しましょう。

兄弟はいないので一人っ子です。

母さんは俺が中学生になった秋に、交通事故で亡くなってしまった……らしい。

らしいっていうのは、事故で亡くなったというのを刑事さんとかじゃなく父さんに直接教えてもらったことと、お葬式の際に母さんは火葬されなかったことがあったから、本当に死んじゃったって思えないんだよね。

だから、今もどこかで生きているんじゃないかって……。

自分のいいように解釈してるだけかもしれないけど。

それで、父さんの方は今も元気にばりばり働いています。

出張が多くて家にいる事が少ないから、なんか一人暮らしをしているのとほとんど変わりません。

なので、いやでも家事全般が出来るようになってしまった。

それで、父さんの仕事なんだけど、何をやっているか一切教えてくれません。

何であんなに秘密主義なんでしょうかね。

ついでに、父さんも母さんも33歳とちよい若い。

仕事の時はスーツ姿の父さんだけど、普段の格好は結構若いんだよね。

とはいえ、五日前に帰ってきて、昨日の夜にはまた出張で出ていったから、普段着を見るのは結構貴重。

最後に俺んだけど、やけにトラブルに巻き込まれます。

トラブルの内容はいろいろです。

こうやって、思考を巡らせている間にも自転車に3回ほどぶつかりそうになってます。

「ちょっと、金貸してくれねえか？」

そして今も、鉄バットを持った帰宅部であろう茶髪さん率いる三人組にいきなりお願いされています。

「ごめん、基本的に必要な分しかお金持たないから無理」

このお金を渡しちゃったら、今日の晩飯が買えなくなってしまつ。

「なんなんだ、その態度は？ 嘗めてんじゃねえぞ！」

「あぶなっ」

咄嗟にしゃがむと、ビューっと頭上を何かが通る音。

その体勢から飛ぶような勢いで男たちの間をつまき抜け、走り出す。

「なっ!?!」

こうなれば、俺の勝ち。

男たちは一瞬、動揺して止まっちゃったから5メートルほどはすぐに離れた。

脚力には自身あるんだよね。

キキキッ

走ってすぐ右に曲がろうとすると、今度は一般車が今頃ブレーキをかけても手遅れな速度で走ってきていた。

「きっつ……」

当たる寸前で、車の上に乗っかり抵抗せずに転がる。

「だっ、大丈夫!?!」

運転していたおばさんが出てきて、倒れている俺に動揺しながらそう言ったけど、はいとは答えづらい。

若干受身を間違えたので右肘が痛いし、さっきの男たちから逃げなきゃいけないし。

「はい、大丈夫です」

それでも、言わないと逃げる時間を失っちゃっ。

「嘘おつしゃい！ 車に轢かれて大丈夫なわけ……待ちなさいよ！」

轢き逃げしない上に、心配までしてくれるっていうのは常識のあ  
る優しい人だな。

確か、俺が飛び出したのがいけないのに車の方が悪くなるんだっけ？

とか考えながらも、走り出す。

ゴールは学校。

## Prologue (1) (後書き)

始めました『Complication』。

1. 「U」複雑「紛糾」化、複雑な状態
2. ・( )しばしばsで単数扱い( )種々の要素「物」の複雑な結合
3. めんどどうな事態「問題」；混乱「紛糾」のもと
4. 合併症、併発症

といろいろ意味のある単語のようです。

英語は苦手です……、俺は3のめんどどうな事態という意味合いでこの題名にしました。

変な単語選んでごめんなさいって気持ちですので、説明しました。

それでは、この少年を中心に広がる話を楽しみにお待ちください  
な

## Prologue (2)

「ゴール……」

走り始めてから5分ほどで完全に巻いたけど、なぜか学校に着くまで走ってしまった。

でも、だからこそ味わえる達成感というものがあるはず。

「しゅんちゃん、おはよ!」

我ながら訳の分からないことを考えていると、横から聞きなれた声が出た。

「はあ、はあ……おはよう」

息を整えてから挨拶して、隣を歩く。

こいつは羽野亜由美 (Hano Ayumi)、俺はあゆみって呼んでる。

長い黒髪を後ろの方で一箇所リボンのようなものでしばっていて、身長は180ぐらいの俺の胸元当たりに頭が来るぐらいの身長。

髪型のことは良く分からないけど、顔は結構整っているし普通に可愛いと思う。

そして、家が隣の幼馴染、小学校の時から高校に入ってもずっと同じクラスと若干呪われている。

どんな腐れ縁なんだろうな、確率でいったらどれくらいになるだろう？

「どづしたの？」

「あ、いやどうもしないよ」

流石に、君のことを考えていたんだよ、とは口が裂けても言えないよな。

てか裂けたら、それどころじゃなくなりそうだな。

痛そうだし、恐いし、妖怪の次元になってくるし。

「……また、どうでもいいこと考えてるでしょ」

「」名答、そのとおり」

気付くと思ひ耽っているというか妄想しているっていうのは、自覚しているが面倒なので直す気はない。

というか、直すとか考えるほどのことでもないよな。

「あっ、また怪我してるー！ やっぱり一緒に登校した方がいい？」

幼馴染である彼女は、俺がやけにトラブルに巻き込まれる事を知っている上でそういつているのだろう。

「いやただのかすり傷だし、一緒にいると大変だろ？」

小学生の時は、自分が生きるので精一杯と一緒に登校することを全力で拒否していた。

正直、よく今日という日を迎えられたと思う。

「そう……だね」

中学生に入って1年と2ヶ月ほどが経った頃。

というか夏休み前ぐらいだったなあって記憶だけど、その時は普段登校するときの二倍は疲れた。

最終的には、背中に背負って走っていたからな。

トラウマになって無くて本当に良かった。

学校に着いた時はなんか幸せそうな顔してて、俺のせいでおかしくなってしまったんじゃないかって本気で心配したという苦い経験だ。

用は、俺と一緒に登校するのは命がけという嫌な結論に達するわけです。

どうでもいいけど、そのおかげで大抵のことでは動揺しないという特技を身に付けた。

「ほら、肘出してよ」

「ほい」

大丈夫だって抵抗しても見せるまでしつこいので、しょうがなく素直に従う。

こいつのこういうお節介な所、嫌いではないしね。

「いやです」

「一度は断る……いい方法だ。流石だな、遊馬」

時は放課後、良く絡んでくる先輩その1に教室を出る前に捕まった。

確か2年B組、名前は秋月流雅（Akiduki Ryuga）。

嫌なこと、無茶なことを頼んでくる先輩。

眼鏡を掛けていて、目に軽くかかるくらいのいい感じの髪の毛の長さ、若干金髪っぽい色で顔も一応かつこいいのだが性格に問題が。

そして、ペテン師のように口が動くし、人の言う事聞かないしで俺の苦手な人だ。

「断固拒絶します、とかかしているんですよ！」

何やら、変人（？）を追い求めているご様子で、最初の方は言い包められて手伝わされていた。

「そんなに暑くなるな……でも、そうか」

そういうと、俺の方を向いていた流雅さんの目は若干横にずれた。

「だが、後ろにいる羽野は手伝ってくれるそうだよ」

「しゅんちゃんと一緒にですよ、秋月先輩！」

いつの間にか、あゆみは流雅さんに言い包められていたようだ。

「で、でも！」

「俺の考えになんの不満がある？　ただ、地球人がいるんだから宇宙人がいるだろうと、65億人を超えた人間がいるのだから特殊な能力を持った人間も少しぐらいいるだろうと、美女がいるなら野獣もいるだろうと……もしか、お前は夢を追い求める童心の心を忘れてしまったのか？」

眼鏡を輝かせこんなことを言っているんだ、関わりたくないのも分かるだろ？

そして、このパターンはこのまま連れて行かれてしまうという……。

「どうしたのかしら？　秋月くん」

その声は、一見タイミング的には救いの声に聞こえるが、俺には良く絡んでくる先輩その2との出会いであり、二人目の悪魔の到来の音でしかない。

「おお、これはこれは井之上ではないか」

彼女は、この学校の生徒会長で井之上葉月（Inoue Hazuki）。

流雅さんと同じクラスで勉強と運動共に優秀、先生や生徒からも信頼が厚く出来すぎたと言ってもいいくらいのお方。

……表向きね。

ストレス発散かしらないが、この井之上さんも俺のことを巻き込みやがる人です。

でも、他の人間からの印象は長い黒髪とアイドルも顔負けしそうな容姿、さらに品のある動きといろいろな面での優秀さからこの学校一の美女と謳われているようだ。

「聞いてくれよ、この町の唯一の危険地帯、誘いの森と噂の高い月木山の麓に一緒に探索に行こうと言っているだけなのに、何故か断るんだよ」

なんだよ危険地帯って、断るのが当たり前でしょ。

「あら、それは面白そ……危ないわね、早速準備しましょうか。今日は生徒会もお休みしなくてはね」

わざわざ言い換えといて、行く気満々ですか。

「俺は行きませんよ?」

その俺の発言により、3人ともこちらを向いた。

「……行かないの、しゅんちゃん？」

「子供のようにはいやいで行くつて言うのが恥ずかしいからといって、すねる事は無いだろ？ それに俺の情報と勘が正しければ、今日、あの場所で絶対に何か起こるんだよ、気になるだろ？」

「生徒会長として、命令するわ。……キナサイ」

最後の井之上さんの声には寒気を覚えるものがあるので深い描写は抜きということだ……ご自由に想像下さい。

## Prologue (2) (後書き)

メインキャラの登場です。

更新のペースは週1回ぐらいで行きたいと思います。

最初は書き溜めたがあるので、がんがん更新してもいいんですが、それだと詰まるので^^;

修正加えて、更新していきます。

それにしても、俺は流行にちよつと遅めですが乗りましたよ!!  
新型インフルエンザ!!

もうほぼ完治しましたけど、40度近くなるとぼーっとしますね。  
流石にきつかったです;;

皆さん、気をつけてくださいね!

## Prologue (3)

「本当に行くんですか？」

目の前には鬱蒼とした森林が広がる。

俺がこの町で来た事の無い、数少ない場所。

「それ以前の問題があると思わないか？ たまに一緒に行動すると  
思い出すが」

「恐かったよお……」

「遊馬くん、あなたは呪われているようね……。現地集合にすれば  
よかったわ」

「だったら途中で止めればいいのか……」

話は1時間ほど前に遡る。

「さあ、みんな乗っていいわよ」

黒くて長い車って、テレビでしか見た事なかったな。

ベンツだっけ？ よく覚えてないけど、これに乗れるのは光栄かも

しない。

「お願いしまーす!」

「すまん」

見とれている間に、みんな乗り込んだので俺も後に続く。

「ありがとうございます」

井之上さんの家は金持ちであるって噂は聞いていたけど、本当だつたんだなあ。

「それでは、月木山の麓までお願い」

「はい、かしこまりました。お嬢様」

この執事さん、完璧だ!

さつきも俺らが乗り込むまで扉を開けていてくれてたし、ちゃんと最後に乗ったし、感情の読めない笑顔をずっと作っているし。

「では……、あつ!」

などと考えている次の瞬間、目の前に車が突っ込んできた。

ハンドルを回し、右側をするような形ですんだ。

そして、止まった車内では沈黙が流れる。

「こわっ、こわっかたよお……」

驚きのあまり声が出ていなかったようだ。

「忘れていたが、遊馬と一緒に移動するのか？」

「……どうでしょうか？ 本人は、スタントマン顔負けの勢いで、扉を開けて外に転がり出て行ってしまいましたし」

「さっきのを考えると得策かもしれないですけど、自分の経験だと一番危険だと思います」

井之上さんの提案により、学校の屋上に移動するとへりがやっつきた。

「でも、試した事はなかったはずよ？ それに、パラシュートならちゃんと4人分あるわ」

「私、会長を信じます！」

「高度が低ければパラシュートは役に立たないと思うんだが」

とかいいつつも、3人とも乗り込んで行ったので着いていくしかない。

「……パイロットのパラシュートは別にあるんですか？」

「何を言っているの、あなたの分を抜かして4人分よ？」

「自転車だろうと、走ってだろうといいいで、自分で行きます。降りてください！」

自分の運の無さは自覚しているんだよ……多分死ぬる。

「そろそろ着くわね」

「よかったあ……」

「心配無用だったな」

その言葉を聞いていても、俺は安心できない。

取り合えず、非常時の扉の開け方は分かったし、多分木の枝の部分だったら一番死ぬ確立が低いはず。なぜ、俺がこんなに真剣に悩んでいるかと言うと、中学生の時にくじ引きに当たる確率で初めての飛行機が墜落したからだ。

あの時は、父さんに助けられたなあ。

「非常事態が発生しました……操縦が利きません！」

「あらら……ホント？」

「ウソでしょ……?」

「……遊馬は本当にパラシュートがないと思って、勝手に扉を開けて飛び降りたようだぞ。俺も続くがな」

流雅さんの声も遠くに聞こえるか聞こえないかの時、俺の頭には走馬灯のように今までの思い出が……。

「パラシュートの使い方なんか分かりませんよお……」

「大丈夫よ、急いで」

飛び降りの結果、なんとか全員無事であるが、俺の格好は見れたもんじゃないぐらいに制服がボロボロの傷だらけ。

「壮絶な1時間だったが、行くぞ!」

「取り合えず、二手に分かれましょ?」

「えっと、私……」

「みんなで固まって行った方が安全ですよ!」

「それはない」

みんなが思い思いにしゃべっているのに合わせていうと、すごい勢いで否定された。

「……………」

二人の先輩にはものすごい恐い目で睨まれた上に、あゆみには目を背けられた。

「遊馬はあっちに行きたまえ。何かを見つけ次第すぐに俺に連絡を。何かを見つけることに関しては期待しているぞ」

「死ぬ気で頑張りなさい。あなたなら死ねるわ」

「えっと、ごめんね？ しゅんちゃん」

そして俺は、置いていかれた。

「呼んどいてそれはないだろ……………、俺が悪いのかな？」

しばらく歩いて、方位磁石を見るとぐるぐると回っていた。

「……………帰れないかも」

不安が募る一方です。

腰あたりまである草と垂れてくる蔓、虫やくもの巣と戦いながら、

半ばヤケになりつつ進む。

もしかしたら、山を超えた向こうに何かあるかもしれない。

なんか、若干傾斜を上り始めちゃったし。

まあ、でも今は春。

夏だったらもつと大変だったろうな……、そう考えるとまだましなのかな？

そういえば、熊とか出てくるのかな……先輩たちなら倒しちゃいそ  
うで恐いけど、俺だったら逃げるしか無さそうだ。

あ、遭難した時のためにお菓子を持ってくればよかったかも、甘い  
物があれば、なんかやっていけそうな気がするんだよね。

「いてっ！」

どうでもいいことを考えていたため、視線がだんだん下になって  
いき、木に頭突きをかましてしまったようだ。

みんなでいた時はあまり感じなかったけど、結構暗いな。

上には、木の葉が空をほとんど覆い隠している……。

「その青年！ 頼みたい事があーっ！！」

と、上を見上げていると前から清しい印象を受ける声。

少女を抱えた男が草木を掻き分けこちらに向かって走ってきた。

「……………」

その男は特徴的で、金色の髪に欧米人特有の顔立ち、上半身裸、そして一番の特徴は背中にワイルドな翼なんかを付けちゃったりなんかしている所。

「……………関わっちゃいけないタイプの人間だ」

俺は方向転換し走り出す事に。

「こいつを助けてほしいんだ!!」

遠くに聞こえるその言葉に、一瞬見えた少女のことが脳裏を過ぎる。

「うわっ!?!」

一瞬考えて振り向くと、想像以上の速度で3メートルほどまでの男は近づいていた。

少女を見ると、なんか……………透けている?

というか、大きな布に巻かれているだけの格好に見えるんですけど。

「いやあ、優しいな。待っていてくれたってことは、この子のことを育ててくれるってことだな?」

待て待て待て!!

「どれだけ、話が飛躍してるんですか!？」

「まあ、動揺するのも無理はないだろう。……こいつ可愛いから  
なんか、的外れなこと言ってるんですけど。

「そんなことよりあなた誰なんですか!」

「俺はタイプ鷹(Falcon)、バトルスタイル翼(Wing)  
の……獣人だ」

だから的外れ……って、この人今何ておっしゃった？

**P r o l o g u e ( 3 ) ( 後書き )**

P r o l o g u e、次で終わりです。

## Prologue (4)

『 どうした遊馬、何か見つけたのか？ 』

「はい、そして対処に困っているので相談したいんです」

『 なら、合流しよう。場所はさっき別れた場所だ。……どうせどうやって帰るか分からなくなっているだろうから、火でも焚いとく、煙を頼りに戻って来い 』

「流雅さん、流石ですね。俺のことなんでもお見通しって感じで」

この人には敵いそうにないな。

さて状況を説明しよう。

さっきのワイルド翼野郎は、俺の有無に関わらず少女を渡すと、映画の撮影で見る空中アクションのように翼を羽ばたかせ飛んでいってしまった。

意味が分からずしばらく突っ立っていたが、自分の無い頭で考えても時間の無駄と理解し流雅さんに連絡したのだ。

なんか、この少女のことを聞いたら答えてくれたんだけど意味不明だった。

何やら、タイプ不可視 (Invisible) バトルスタイル温度調節 (Regulate Temperature) という訳の分からないことを最初に言われた。

……訳が分からないって言い訳はもういいか、信じられないが無理に理解するとしてよう。

タイプってのはさっきの男は鷹の翼っぽいのがついていたから見た目で判断できそう、俺が抱えている少女もなんか透けてるし。

でも、バトルスタイルとかなんとかは理解が困難だ。

さっきの男の翼は分かるけど、温度調節ってなんだろう？

能力をまだうまく使えないから体とかに直接接触すると死ぬかもしれない、気をつけるよ？って、言い残して行っちゃったんだもんなあ。

そういえば、変なことは教えてくれたのに、名前とか教えてくれなかった。

またあつたら、名前が分からなくても絶対に気付くけど。

「ふう……すうー」

いきなり少女が寝息らしき音をだして、びっくりしたのは秘密……。

幻想的な銀色の髪に少し隠れた可愛らしい顔、両手で抱えているので柔らかい体の感触が若干、俺の理性に危険を知らせている……。なんか守ってあげたいと思えてしまっているんだけど、俺は一体どうすれば……。

「分からん」

嗚呼、早くみんなと合流したい。

しばらくあたりを見渡していると、薄っすらと見える煙が見えた。

これで、取り合えず一安心だな。

「知らん」

俺の期待は、ばっさりと裏切られた。

「遭難していたのにも関わらず女の子を誘拐してくるなんて、遊馬くんって結構やるのね。会長びっくりよ」

そして、俺の第二の期待も裏切られた。

それどころか、俺の話を信用していないのか無視されたのか、ひどいことを言われている。

「ホントの話なんですよ！ 翼を生やした男がささーっとやってきて、少し打ち解けたら空にひゅーんって飛んでいっちゃったんだけど、その時この少女をぼっと忘れていってしまったって話！！」

「本当かどうか以前に、遊馬には説明するという能力が低いと思うのだが、井之上どう思う？」

「言つまでもなく、そうじゃないかしら？」

そこを指摘されるとは思わなかった。

分かりやすく効果音までつけたのに、そんなにひどいのかな？

「それより今日はもう疲れたわ。帰りましょうよ」

「久しぶりに熊を相手したからな」

そつちの三人組の探検も壮絶だったのか……？

というか、一名会話に参加していないのは気絶していて（理由は多分分かる）井之上さんの背中いるからだ。

「……取り合えず、あなたの家に置いて上げなさいな。2ヶ月間は家に遊馬くん一人でしょ？」

正直、思いついてはいたけど、今日の所はそれしかないのかな。

「そうですか……って何で知ってるんですか!？」

「フフフ……気にしてはいけないわ」

やっぱり怖いよ、この人。

「今日は解散するが、その少女のことはとても興味深い。今度、詳しく話を聞こうではないか」

と言いながら、さっきからものすごくくうるさい音を出しているへ

りに井之上さんに続いて流雅さんは乗った。

バタンッ

「それでは、ごきげんよー。頑張って帰るのよ」

「自転車無しでここから帰るのはきついだろっが、走ればたった1時間だ！ 君ならできる！」

そして、俺はまた一人にされた……。

「すー……」

いや、謎多き少女と二人。

今日この日、俺の変わった日常はさらに複雑に変異した大変なモノへとなることになった。

求めていたわけでも、今の日常に不満を感じていたわけでもない俺の日常が、

この可憐な少女のおかげで……。

## Prologue (4) (後書き)

これにて Prologue 終わりです！

週一回以上のペースで更新していこうと思えますので、これからもよろしく願います^^

さて、作者の話になりますが、先週あたり新型インフルエンザにかかってしまいました。

去年は全く病気をしなかったので、久しぶりにきつい。

皆さんも風邪等には気をつけてくださいね！

私も今は元気いっぱい学校生活頑張っているので^^

## Episode 1 眠り姫 (1)

「どうしようっかなあ……」

先輩達と別れて2時間以上、やっと家についた。

取り合えず、未だに目を覚まさない少女を俺のベッドに寝かしとく。

……身体が冷えてる気がするけど、死んでないよな？

先月ぐらいにしまったばかりの毛布を引っ張り出してきてかけて置く。

明日絶対に筋肉痛であろう腕が、毛布を出すという作業をするだけで悲鳴を上げる。

2時間以上も人間一人の全体重を支えていたんだから、当たり前前っちゃ当たり前前だけ。

「それよりも……、さっきより透けてるっていうか、ほとんど消えかかっている？」

人間が消えそうってどういうことっちゃ……透けてる時点で普通ではないのは気づいてるけどさ。それにしても、まじでどうしようか。

こうして、考えなしに家まで連れてきちゃったし、未だに目を覚まさないし、腕は張ってるし、帰る時にはもう日が暮れてたし、てかも透けてるっていうか見えないし……？

「マジで？」

布団は盛り上がっているが、実態があるか不安になって手を伸ばしてみる。

通り抜けたりするんじゃないかという考えも浮かんだが、触れるので実体はあるようだ。

顔の部分っぽいからすぐ離す。

「この状態でも大丈夫なのか？　というか、この状態が普通だったりして」

今は布団の中だからいいけど、歩き回られちゃったらどこにいるか分からなくなっちゃうよなあ……。

てか、今更だけど透明人間ってことか。男の夢じゃないか！　……って、何考えてんだ俺は。

取り合えず、身体が冷えてるようだし、目が覚めた時のために温かいコーヒーでも入れてくるとしよう。

透明人間への対処の仕方なんかしらんからな。

「……状況変わらず、か」

自室に戻ってきた俺は、両手に持ったカップを膝ほどの高さもない程度のちゃぶ台の上に置く。

そういえば、晩飯食べてないな。

今はもう10時過ぎ。

空腹を感じるには十分の時間だ。

でも、買い物するの忘れちゃったし、好きじゃないがカップラーメンを食べるしか無さそうだ。

自分で作った飯の方が好きだし、作るのも結構好きだったりするんだけど、しょうがないか。

……この少女、そろそろ目を覚まさないかと本気で生きているか不安になってくる。

特に何もせずにしょうもないことを考えるといつどこでもいい日課が残っているのに……。

「……い」

「わっ!?!」

微かに声が聞こえた?

「ちむ……い、ちむいよお……」

今度は擦れている声を聞き取れた。

「さむい!? 寒いんだな! って、ええーとっ」

周りを見渡すと、さっき持ってきたカップが目に入り手に取る。

「ちょっと上半身起こせるか? コーヒーあるぞ?」 首筋あたりである場所に手を当て起き上がらせよう……とした瞬間、少女に触っている手に違和感を感じた。

「というか、手だけじゃない。」

全身の血の気が引くような感覚、無意識に身体が震える……。

この感覚は 寒気?

「そういえば、身体とかに直接触ったら死ぬかもしれないってワイルドな翼野郎が言っていたような……。」

「って、いちゆまでっ!?!」

寒さで呂律が回っていないが咄嗟に手を離す。

「一応、いつまで触ってたんだよ俺、って言おうとしたんだよ。」

「あっ!」

全身が寒さで言う事を聞かない状態で、カップを少女に向かって落としてしまった。そして、俺も何も無いのに後ろに倒れそうになっているので助ける事は出来ない訳で……というか、少女は透けていたけど今見えるようになっていたような?

「あつちいーっ!」

後ろのちゃぶ台の上に置いておいたコーヒートを倒し、身体に引っかけた。

「きゃっ!?!」

取り合えず、眠り姫という現状を打破できたようだ。

てか、眠り姫から聞く最初のはっきりとした声が悲鳴になるとは思わなかったなあ……。

## Episode 1 眠り姫 (2)

「……先輩の仕業だな」

風呂場を見ると二人目の眠り姫が横たわっていた。

ようは、気絶したまま放置されてしまったのであろう幼馴染だ。

なぶに言つと、二回目。

「面白い反応見たさに待ったのにこの程度とは、お前には笑いのセンスが無いのか？」

「のわっ！ なんているんですが流雅さん!？」

いつの間にか、流雅さんに背後を取られていた。

「おお、その反応だよ！ やれば出来るじゃないか。……それに目が覚めたようだな君、おはよう」

「おはようございます……りゅうが、さん？」

呑気に挨拶してるのはいいけど、いつから侵入しているんだろうか。

「いつからいるんですか？ というか、井之上さんは？」

俺の慌てぶりは見られてるとちょっと恥ずかしいんだけどなあ。

「遊馬より少し後だ。井之上は家柄上、あまり遅くに出歩くのはよろしくないようだ」

少し後って、全く気付かなかったぞ。

「一体どこに隠れていたんですか？」

「遊馬の部屋のタンスの中だ。俺の頭上から毛布を取り出していた時は、流石の俺も少し焦ったがな」

その光景を流雅さん目線で思い浮かべると、変な構図だな。

なんで俺は気付かなかったんだろうかね。

「もういいです。分かりました」

「お前の話を思い出して、お前に一つ言いたい事がある」

「なんですか？」

「やはり、美女がいるなら野獣もいるだろ？」

「お引き取りください」

野獣とは違うけど、合ってる様な気もしてくる。

はあ………なんで一番意味不明な持論が当たるんだよ。

ってその前に、この少女自体が特殊な能力の持ち主だし、すでに二つも当たっているわけか………。

「まあいいだろう。そいつのことも3つほど分かったからな」

「はい？」

3つ……？

「では、さらばだ」

「一つ目は俺の体温を奪った事だろう。」

「二つ目は……透明になること？」

最後の三つ目は一体何……？

「こじは……っ！？ しゅんちゃん!？」

あ、こいつ忘れてた。

「お目覚めですか？ お姫様」

「ちょっと、何言ってるのしゅんちゃん？」

俺もちょっとからかおうと思ったただけなのに、その結果は痛く冷たい視線。

「あゆみさんが気絶なされたので、先輩がわざわざ俺の家に送って下さったんだよ」

「……ごめんなさい、帰ります」

あゆみはすたつと立ち上がって、こっちに来ると新顔の目が合う。

その姿は布で身体を隠しているだけの格好でありまして、それが俺に寄り添うような状況であります。

「しゅんちゃんの……ばかあああつっ！……！」

その瞬間目の前に何かが飛んできた。

自分の身体が倒れ始めて気付いた、俺の顔面にプロボクサー顔負けの速度で鉄拳が飛んできた事に。

俺は何か悪い事をしましたか？

Episode 1 眠り姫 (3)

少女を風呂場に押し込み、あゆみの鉄拳によって意識が半分以上飛ばされつつも、俺は少女について洗い浚いしゃべった。

「そうなんだ。私が気絶していた時、しゅんちゃん大変だったんだね」

まだ顔がヒリヒリする。

「まあね」

「はあ……私もしゅんちゃんに送ってってもらいたかったなあ」

「重いだろ」

「ばか！」

流石に二回目の鉄拳は避ける。

「二人もいたらって意味だよ。お前は俺を殺す気か！」

「……そっか、それよりこんな時間なら帰らなきゃね」

といて、あゆみは立ち上がる。

「どうせ、旅行好きな親は家にいないんだろ？」

「……なんで知ってるの？」

旅行好きなのは知っていたが、流石に今日いない事は知らない。

とはいえ、先輩のことだからいないのを知ってたからこんな遅くまで俺の家に放置したんだろうなと思っただけ。

「泣き虫なお前だから一人は寂しいだろ？」

「泣き虫っていつの話よ！」

「前見たく泊まってっついていいぞ。空いてる部屋なら幾つかあるし…俺が少女と二人きりってのもまずいだろ？」

と言って、俺は扉の方を見る。

「……泊まってく！絶対に泊まってく！」

「お、おう……」

なんでそんなに気合い入ってるんだ？

「それと服持ってきてくれないか？」

「どうして？」

「少女の着替えがなくてさ。お前よりも背は高いから、服を取り合えず俺の貸すけど……な？」

「うん、分かったよ！」

取り合えずはこれで大丈夫だな。

あゆみが部屋を出たのを見送りつつ、服とタオルを風呂場の前に運ぶ。

「そついえや、シャワーの使い方分かるよな？」

ずっと風呂場の中にいるはずの少女に話しかける。

「……分らないです」

「は？」

ってことは、こいつは風呂場でずっと突っ立ってたのか？

「付け根の右側を捻ればお湯が出るぞ。試してみる」

「くしゅん……はい」

今の可愛い声は……いいな。

じゃなくて、風邪引いちゃったか？

しばらくすると無事水のはねる音がした。

今度、あゆみと一緒に入ってもらおう事にしよう。

どっちら、こいつはいろいろなことを知らないようだ。

「べとべと感がなくなると、大分違うなあ……」

コーヒーによりずっと気持ち悪かった体をさくつと洗い、風呂場から出た俺は階段の方を見る。

さっき俺が入る前にシャワー浴び終わったあいつは、着替えてあゆみと一緒に俺の部屋にいるはずだ。

多分心配ないだろう。

リビングでカップラーメンでも作って持っていくとしよう。

そっけないけど、一応あゆみの分もね。

Episode 1 眠り姫 (4)

「私のご主人様ですか？」

「違うわ！」

自分の部屋に戻ると、少女からのいきなりの謎の質問。

幼馴染という名の元凶は、隣で笑いを堪えている。

「それより腹減っただろ。食べるか？」

ちゃぶ台に、ちょうど3分ほど経ったカップラーメンが三つとお茶の乗ったお盆を置く。

「しゃんちゃん、ありがとう！」

有無も聞かずにあゆみがシーフード味を捕獲。

「……………」

少女はカレー味に興味を示している。

「カレーって、何ですか？」

カップラーメンには疑問を持たずに、カレー味には何ときますか。

「うまいもんだよ。早く食べないと伸びるぞ」

すでに5分経過していると思う。

俺も、しょうゆ味を食べ始めた。

「……………」

そしてさらに5分経過、早いものであゆみは食べ終わった。

俺は若干猫舌なので、食べるのは遅い。

そして、少女はまだカップラーメンを見つめたまま動かない。

「食べないのか？」

「……………」

俺の言葉に反応したのかしないのか、ふたを取り箸を割り、そして俺らとまねをするように麺を取り息を吹きかけて口の中に…………。

「おいしくない、です」

「当たり前だ。麺がつゆを吸っちゃってるよ」

「しゅんちゃん、勿体ないね」

「お前食べるか？」

「さすがにいらないよ!」

俺も同感、捨てるしかないな。

「そういえば、名前は？」

カップラーメンをお盆に戻しながら、ずっと気になっていた事を少女に聞く。

「あすま、しゅん」

「うそつけ！」

幼馴染を見ると、笑って……いなかった。

「さっき聞いたんだけど……分からない、ないんだって」

「だからって人の名前を教えるな……って、え？」

「分からない……ない？」

「そうなのか？」

「はい」

少女はあまり感情を顔に表さないようで、今も何を思っているのか読めない。

「……なら、作ればいいか」

「作る？」

「そ、花子とか」

「しゅんちゃん！ それはちょっと……、エリザベスは？」

俺の気持ち察して、すぐにあゆみが会話に乗っかる。

「それもどうかと……てか、猫と名前かぶってる」

名前のかぶってしまっている猫っていうのは、俺が毎朝エサを与えている子のことだ。

「私のなまえ……」

「ウメさんってのはどうだ？」

「それより、あいちゃんとか！」

「それも猫と名前かぶってる」

猫は一匹ではないです、ってどうでもいいか。

「あ、本人にも聞いてみようよ！ 名前、何がいい？」

「それはいいな、なんか思いついた？」

少しの沈黙、多分考えているのかな。

「……花子エリザベス・ウメあい」

「それはなしの方向で」

「そ、それも一つの案としてはいいんじゃないかな……?」

フォローしようとするとは、あゆみは優しいなあ。

というか、もうひとつ俺の中で考えているんだけども、それは単純というかなんというか。

この少女に抱いた気持ちそのまま、かわいい、守ってやりたいっていう気持ちの言葉。

「タマちゃん!」

「違うわ!」

やべ、俺の考えていた事とタイミングがすごく良かった幼馴染に対して大声を発してしまった。

「何が違うの!?!」

「違うって訳じゃないけど……、てかまた猫と(以下同文)」

「じゃあ、しゅんちゃんは何がいいの?」

「……カレン、とかは?」

「……かれん?」

聞いていただけの少女が興味を示した?

「そ、どうだ?」

「……カレン」

言葉をかみ締めるように、少女の口から漏れる。

「それより、マリー・アントワ……何とかさんの方がいいよ！」

この幼馴染はもうちょっと自重してほしい気がしなくもない。

猫とは名前かぶってないけど、歴代のフランス王妃の一人を何とかさんとは失礼な。

「カレン、いい」

「……マジで？」

こうして、少女はカレンと呼ばれることが決まった。

「……カレンちゃんか、マリー・何とかさんはダメなの？」

諦めが悪い幼馴染は放っておいて。

「どした？」

少女……カレンが座っていた上体から、ストーンと寝転がった？

あゆみが少女に触れる……。

「あつたかい……しゅんちゃん熱あるよー!？」

透けなくなっ  
たと思っ  
たら、今  
度は風邪  
引いたか  
！？

**E p i s o d e 1 眠り姫 (4) (後書き)**

更新が止まっていたいましたが、一気に三話更新です！

## Episode 2 少女の記憶 (1)

「すうー……すうー……」

俺のベットにまた移動した少女改めカレンは、しばらくするとすぐ眠ってしまった。

時間はすでに2時、あゆみは台所で氷枕を作りに行った。

「ふあゝ……はあ」

流石に眠い……。

俺には毎日の日課が二つある。

帰宅部である俺は毎日筋トレしてるんだけど、それは腕がパンパンだし、今日ぐらいは休みでもいい。

けどもう一つ、毎朝の近所の空地に住んでる猫たちのエサやりは眠いけどかかしたくないと思う。

が、寝たらもう起きれなそうだし、ここは鏡先輩に頼むしかないかな。

一食抜きなのは、猫たち可哀想だしね。

えっと、鏡真(Kagami Shin)、鏡先輩は俺の憧れの先輩で、猫のエサやりの夜を担当してもらってる。

同じ学校の3年C組、人間関係が苦手みたいだけど、昔剣道をやっててとっても強くてとても優しい人なんだよね。

『ドゴオオオー……バババツ……』

……ケータイから出た音は、いつものことだからスルーしようと思っただけ。

あと、夜だったらいつ電話してもいいってことにもなっていたりする。

『俊か、どうした？』

「いつも悪いんですけど、猫たちの朝のイサやりお願いしてもいいですか？」

『そんなことなっ』

……切れた。

とりあえず、かけ直してみる。

『……ただいま、電波の届かない場所にいるか、電源が』  
『もう一回。』

『……ただいま、でん』

よくわからないけど、鏡先輩大丈夫だろうか……。

今日はどうも、災難の続く日のようだし、いちいち気にしないことにしよう。

「カレンちゃんの様子、どう?」

あゆみが氷枕を右手に戻ってきた。

「さっき熱が38度あったし苦しそうだったけど、今は結構落ち着いてるかな」

「よかった。……いきなり倒れちゃったからどうなるかと思ったよ」

本当に落ち着いてなによりだな。

このまま寝かせておけば、明日には元気になってくれるだろう。

……改めてカレン寝顔を見ると、すごく愛らしく感じる。

あゆみも静かにしてれば純粹に可愛いと思えるんだけどなあ。

「そつえば……前にもこんなことなかったっけ?」

あゆみは、カレンの頭の枕を優しく氷枕に変える。

「こんなことって?」

「小学生の頃、私が風邪引いて学校休んだときだよ」

「あゆみって、前は結構身体弱かったからな」

いきなり話し始めてなんのことかと思っただけど、思い出した。

小学校に入ったばかりのこと、あゆみは転校してきたんだ。

転校生つてのもあるけど、それに身体も弱かったことも重なって友達がすぐできなかった。

けど、俺はあゆみがこっちに引っ越してきた日にたまたま出会いそれからずっと幼馴染。

んで話を戻すと、あゆみが風邪を引くと俺は窓からあゆみの部屋に侵入。

あゆみの親は、今は旅行に行くほど時間に余裕があるが、両親共々ずっと仕事仕事って状況で、あゆみが風邪を引いても会社を休めないことも多々あったのを前の俺は知っていたからだ。

「最初はすつごくびっくりしたよ！ 二階の窓から人が現れるなんて思わなかったもん」

「俺の部屋のベランダからだと容易に行けるんだよ。とはいえ、今思つとちびの時の俺はやんちゃだったなあ」

「今だって、無茶ばかりしてるじゃん！」

「そうか？」

自覚ないのは我ながらまずいな。

「……しゅんちゃんがそばにいてくれたから、安心して寝られたんだよ」

「にやけてるぞ」

年頃の乙女がふにやけた顔しちやまずいだる。

「そういうこと言わないの!」

「本当のこと言っただけなのに」

「ふんっ!」

わざとらしくそっぽを向かれてしまった。

「まあ、それにしても懐かしいな」

最初はこっそり窓から侵入してたけど、いつの間にあゆみの母親も家のことに専念できるようになって、親公認で窓から侵入するというおかしな状況になって、あゆみも休みがちにならなくなって、今じゃこんなに明るくなって、学校の休み時間になればあゆみの周りには友達が集まってくるようになった……。

俺もちびの時から、成長してるんだろっかね?

「なあ……あゆみ、俺ってあの時と比べてどう?」

とって、あゆみの方を見る。

「……」

カレンの寝ているベットにしがみつくとように眠っていた。

話すだけ話して、俺が話を振ったらこれですか。

「……………あゆみの布団でも用意してやるかな」

そっぴゃ、先輩電話してからか、目が冴えてきた気がする。

疲れも若干和らいで……………って気のせいかな。

とりあえず、あゆみが風邪引かないようにしないと。

**E p i s o d e 2 少女の記憶 (1) (後書き)**

更新遅れ気味ですいません^^;

E p i s o d e 2は過激なことは一切なしです。

電話の向こうだけです。

Episode 2 少女の記憶 (2)

「うん……」

なぜか眠気が覚めていた俺が部屋に戻ると、布団から唸るような声が聞こえた。

「寢言？ 起きた？」

顔を覗き込んでみると、いきなりカレンが目を開いた。

「お、おはよ」

「……」

カレンは瞬きをしながら沈黙、俺がすぐに一歩下がると上半身を起こした。

やましいことはないつもりだけど、鼓動が早まる。

「汗掻いてたし、水でも飲む？ 今持ってくるからさ」

と言って、なんとなく居心地が悪くなった俺は部屋をまた出ようとする。

「……」

が、静かに服を捕まれた。

「ど、どうした？」

不意打ちで、驚いた俺がいるのは秘密。

カレンに向き直る。

「一人に……なりたくない」

よく見ると、カレンの瞳からは涙が流れ零れていた。

とても弱弱しく、今にも崩れてしまいそうな表情……。

「……分かったよ」

理由は分からないけど前の自分と重なり、とてもじゃないけど見捨てられない。

俺はベッドの端にそっと座る。

とはいえ、どうしたらいいのか分からない。

カレンはずっとこっちを見ているので、気まぜく感じ部屋を見渡す。

寝ているあゆみを移動することに抵抗があつて、用意した布団に寝かせてある。

静かなせいか、時計のカチツカチツって音がやけに大きく聞こえる。

服は捕まれたまま。

あゆみに殴られた顔がまだ少し痛い。

あゆみが目を覚ましたら、この状態ってまた殴られるのかな。

あの鉄拳は、鍛えてなくて出せるものか？

でも、あゆみは俺と同じで部活には入ってないはず……。

「ご主人様」

「うあ!？」

思考が飛んでる時に声をかけるとびびるので止めてほしい。

「って、ご主人様じゃないよ!？ ……どうしたの?」

「なぜそんなに優しくしてくれるんですか?」

「え? 質問するほどじゃないか?」

カレンみたいな子だったら誰でも優しくするでしょ。

本当は、ただ流されてるだけな気もするけど。

「……えっと、母さんに『女の子には優しくしなきゃダメよ』って  
言われてたからかも」

カレンが反応してくれないので、答えを搾り出す。

「それだけですか?」

だけとか言いますか。

「そ、それだけ。……そろそろ落ち着いた？」

「……………」

カレンはまだ何か考えているのか、ぼーっとしている。

ふと、ある事を思い出した。

あゆみはカレンに触れたのに何も起こらなかったようなあ…………。

「ちょっと、おでこ触っても…………いい？」

途中まで言っつて、傍からみたら今の発言はセーフかなとか考えてたりする。

カレンは静かに頷いたので、そつと触れてみる。

「まだ熱いじゃん!! 横になってなさい!!」

「は、はい」

「あ、ごめん。…………大声出して」

全然熱が下がってないことに焦ったけど…………触れた？

カレンは素直に横になった。

「……あのさ、聞き忘れてたけど、俺の体温奪えたよね？」

「えっ？」

カレンは目をぱちくりさせている。

無意識ってことかなあ。

「そういえば……、イカロスさんが、特殊な能力を君は手に入れて  
いるはずだよ。すぐ慣れると思うから、どんどん使っていきなさい  
……って」

イカロスさん……あのワイルド翼野郎だろうな。

どんどん使われたら、慣れる前に俺死んじゃう気が……。

「どんな能力かは言った？」

「言ってませんでした」

確か俺には、温度調節 (Regulate The Temperature) って言うんだけど、もっとよく聞いておくべきだった……。

でも、調節って言うてるんだから、逆に熱を逃がす事も出来ると思  
うんだけど。

「うーん……、カレン？」

「はい」

「試しに、手から熱を出すイメージでもやってみてもらっていい？」

生物に対してしか体温調節できないっぽかったら、俺が生け贄になるしかないな……あはは。

もわッッ

「うえ？」

なんか暖かい部屋に入った時の感覚を感じた。

レベルが何倍も違う感じで……。

じゅわわっ

「……あれ？」

変な音がして上を見ると、きれいなお星様がきらっとな輝いていた……。

**Episode 2 少女の記憶 (2) (後書き)**

久しぶりの更新で、申し訳ないです。

妹も小説始めましたので、見ていただけると幸いです。

<http://ncode.syosetu.com/n6128k/>

Episode 2 少女の記憶 (3)

「できました」

風が吹き抜け埃舞う部屋で、カレンの返事が聞こえた。

「……ああ、出来たな」

屋根のない室内はまだ熱が籠っている。

ベットを見ると、

「あれ？」

「……さむい、です」

カレンがまた見えなくなっていた。

「……ここか？ 手、だよな？」

「え……？」

俺はベットの上に慎重に手を伸ばし、見えないが細いものを掴んだ。

「能力に早く慣れてもらわないといけないし……。俺の体温、少しずつ奪える？」

内心はドキドキ……。下手したら凍死する気がするもん。

「……やってみます」

何もないところから、カレンが徐々に透けて見えてきた。

「も、もうそろそろ、そろそろ、ストツツ!!」

「はい」

まだ、若干透けているカレンから手を話す。

「コ、コーヒーでも、あとはコーヒーでも飲もうか……」

これ以上は無理、さ、寒すぎ……。

「もう、寒くないか？」

リビングに移動し、俺はカレンがコーヒーを飲み終わったのを待ってから言った。

「はい、大丈夫です」

俺の部屋のことは……あとで考えよう。

てか、忘れよう、あれは気のせいだ。

『午前中は晴れているところも多いですが、午後になるにつれ全国的に雨が降るで』

降りてきてリビングの来た時になんともなく付けたテレビをなんとなく消した。

「昨日は何も食べてないし、お腹空いてるだろ？」

「……」

カレンはお腹をさすってから頷いた。

「カップラーメン……いや、トーストの方がいいか？」

カップラーメンは伸びたの食べて嫌なイメージが出来ちゃってるかも、とか無駄に考えをめぐらせ、すぐに作れる別の案を出してみる。

「はい……？」

一応頷いたけど、頭の上に？マークが見える。

「んじゃ、少し待ってて。ついでにコーヒーのおかわりいれとくから」

ふと時間を見ると、3時20分を少し過ぎた所だった。

今日は火曜日……学校休んでいいだろうか。

「はい、おまたせ。簡単だけどね」

トーストはトースターで作り、コーンスープも用意。

あとは、マーガリン、イチゴジャム、ブルーベリージャム、ピーナツバターを持ってきて終了。

「そういえば、どこから来たんだ？ 話して大丈夫なら、知ってる事を教えてほしいんだけど」

今更な質問をしつつ、トーストを食べた事が無さそうなので、取り合えずトーストにマーガリンだけを塗って皿に乗せてカレンの前に置いた。

「……」

カレンは質問を聞いていたのかいないのか、トーストをしばらく見つめたあと両手で持ち、恐る恐る一口食べた。

「おいしいか？」

「……普通です」

おいしくもまずくもないのかな？

二口、三口と全部食べたから、嫌いではないようだ。

「まだ食べるか？」

「……あつつ、熱いです」

容器を持ち、コーンスープを飲もうとしたが想像以上に熱かったようで、あたふたしている。

というか、さっきから返事になってないんですけど……。

「これはどうだ？」

次はトーストにイチゴジャムを塗って渡す。

その前に、カレンを観察しながら俺はコーンスープを飲み、ピーナツバターでトーストを一枚食べていたけど、それはどうでもいいか。

「……おいひいでしゅー!!」

「おいしいのは分かったから、食べながらしゃべるな……」

予想以上の反応に驚いていると、あっという間に食べてしまった。

「次にこれはどうだ？」

俺はブルーベリージャムを持って見せようとしたが、カレンは俺が持っているものには目もくれず、イチゴジャムを凝視していた。

その輝く目は、もう一枚くださいと要求しているように見えるので、素直にもう一枚作る。

「……結構食べたな」

「はい」

その後、カレンは黙々とイチゴジャムを塗ったトーストを10枚

食べて大人しくなった。

「あつ、……私はずっと深い深い眠りの中にいました」

カレンが何かを思い出したように語り始めたので、びっくりしつつも俺は静かに聴くことにした。

俺の質問、ちゃんと聞いてたのな。

Episode 2 少女の記憶 (3) (後書き)

屋根が無くなった後は、まったり、そしてちょっとシリアス？

基本的には面白くいきたいですが、次は。

Episode 2 少女の記憶 (4)

私は深い深い眠りの中にいました。

まって……置いてかないで……

暗い… ぐびっし……

生きてちゃいけないの……？

ひとりじゃないで……

「め……」

目を覚ますと記憶がぼっかりと無くなってる。

何も思い出せない……そっきの夢のことだけえ……。。

いつも見ているように思うのに……。。

「ちょっと、目え覚ましたか」

声がして、ぼーっとしていた意識がすっかりし始める。

暗くて何も無い四角い部屋。

唯一の光が差し込める場所には柵がついていて……部屋はずっと揺れている。

声はその柵の向こうから聞こえているみたい。

「だれ……ですか？」

「なんだ、また飛んだか。もう、教える必要ねえよ。自分で思い出せ」

思い出すも何も、記憶は違和感があるぐらいすべて思い出せない。

「冷たいねえ、寝不足なんじゃないの？ ……僕が運転変わってあげようか？」

それに頭が痛い……なんだか寒い……。

暗闇に目が慣れて周りを改めて見渡すと、大きな布を見つけてそれに包まる。

「……俺に話しかけるなって言っただろ？ てめえら能力者を俺は信用しちやいねえんだよ」

「そんなこと言わないでくれよ。僕たちは同じ輸送任務を受けた仲間じゃないか」

寒さは凌げた気がするけど、頭の痛みは直らない。

「しゃべるな、てめえの仕事に専念しろ」

柵の向こうから聞こえる声が頭に響き、顔をしかめる。

「そろそろ、受け渡しの研究所には着くだろ？ それに、護衛のために来たけどやつらにはこの任務の情報が流れているように思えないよ。よって僕の仕事はあつてないようなものさ」

「もう一台はちゃんと着いてきてるか？ てめえは着くまでずっと見てろ！ とにかくしゃべんじゃねえ」

頭の痛みが少し弱くなって、思考が回り始める。

……「ここはどこ？」

「大丈夫でしょ、一本道で迷子になるわけじゃあるまいし……あれ？」

「どうした？」

「……なんか、燃え上がってるよ？」

「はっ。」

ド  
ン  
ン

「きゃっ！…？」

強い揺れ、そして部屋が急に回り始めた!?

「くそっ、タイヤをやられた!！」

壁に叩きつけられる。

気持ち悪い、動けない……。

「斬ってちょうだい」

部屋横向きになって動きが止まった時、部屋の外から声が聞こえた。

柵のある壁とは反対側の壁に光の線が入ったと思うと、壁はきれいに崩れた。

「まぶしい……」

目が慣れてくると、大きな道路とその両側に広がるジャングルを思わせる茂みがまっすぐに見えてきた。

その真ん中に二人に人影。

「この子か?」

「多分ね……可愛い子」

細くてすらっとした少女と、腰に棒を巻きつけ深く帽子を被ったおじさん。

「だな」

「私の子には負けるけどね!」

話しながら二人は近づいてくる。

「何言ってるんだよ。……雑談してる暇もねえぞ」

「そうね……というか、ほんとにこの子でいいのよね? シドさん  
って最低限のことしか言わないから」

「大丈夫だろ? てか、全員助けりゃその中にいるだろ?」

ぶつかった体が痛い……いったい何の話をしてるんだろう?

「それじゃだめなの。おまじないしてあげなきゃいけないんだから」

「お前……他にも能力あるのか?」

「さあ?」

バチッ

「きゃっ!?!?」

「っ!?!?」

いきなり、体中がしびれた!?

「僕にケンカ売るなんて、君たちバカかな?」

「眼帯の奴、時間稼ぎにもなりやしねえじゃねえかよ」

「カイトくん、敵の相手してくれてたんでしょ！！ 大丈夫なの！？」

「こんなんにやられるほど軟じゃねえよ……。ちよっくら行ってくるから、こいつはお前に任すぞ」

「分かったわ。頑張つてね？」

体は痛いし、びりびりする感覚がまだ残ってるから逃げた方がいいと思うんだけど動けない。

「さてと……。透けてる可愛い子ちゃん？」

「……私ですか？」

誰なんだろう？

よく分からないけど……。なんだか温かそうで優しそうな人って思う。

「そうね、あなたしかいないし……。怪我してるわね？ ちよっとじっとしてて」

そっと手を握ったと思うと、私の体から光の粒がいっぱい現れて当たりを明るくした。

「……あれ？」

気がつくとも体が痛くもしびれてもいない。

「不思議でしょ？ 今度はおまじない、うまくあなたが逃げられるように……。本当に効果があるか分からないんだけどね」

温かい笑顔に思わず、見入ってしまった。

「その子連れて行けばいいのか！？」

おまじないと言われたけど何も起こらなかったので不思議に思っている、翼の生えた男性が現れた。

「あなたは誰？」

「俺はカイトって奴に助けられたタイプ鷹（Falcon）」

「名前だけでいいわ」

「……イカロスだ。手伝えることがあれば何でもやるって言った所、少女を逃がしてほしいって言われたんだ！」

「そう……信用しても大丈夫そうね」

細身の少女は、しばらくイカロスと名乗った男を見つめると私から離れた。

「私はまだすることがあるの。しっかり頼むわね！」

「任せてくねー!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4471i/>

---

ComPliCaTion

2011年1月21日14時39分発行